

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520023

研究課題名(和文)環境思想の深化と強化 - 現代ドイツ実践的自然哲学研究

研究課題名(英文) Deeping and reinforcement of the environmental thought=A study of modern practical natural philosophy in Germany

研究代表者

山内 廣隆 (HIROTAKA, YAMAUCHI)

広島大学・文学研究科・特任教授

研究者番号：20239841

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：研究成果は『ヘーゲルから考える私たちの居場所』(晃洋書房)に凝縮されている。この本は昨年十一月に出版された。この研究の成果は以下のようにまとめられる。(1) 国家と宗教の関係のあるべき姿を提示できた。(2) 現代アメリカの新自由主義批判のための、理論的根拠を構築できた。
以上の二つの成果を、私はドイツ実践哲学の代表者ルートヴィヒ・ジープのヘーゲル解釈に依拠しながら、導き出すことができた。

研究成果の概要(英文)： My study results are condensed into "our whereabouts considered from Hegel" (Kouyou Shobo). This book was published in November of last year. An outcome of this study is gathered as follows.(1) the related true form of the state and the religion could be shown.(2) a theoretical basis for neoliberalism criticism in the present-day United States could be built.
I could derive two above mentioned outcomes while depending on Hegel interpretation of a representative Ludwig Siep of German practice philosophy.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：国家と宗教 新自由主義批判 ヘーゲル ルートヴィヒ・ジープ 政治哲学 啓蒙主義批判 EUとカント
レオ・シュトラウス

1. 研究開始当初の背景

地球温暖化に代表される地球環境問題が、避けて通れない問題として人類に強く意識され始めたのは、1992年にブラジルのリオ・デジャネイロで開催された第二回「環境と開発に関する国連会議」(通称、リオ・サミット)からであろうと、私は考えている。この会議が起爆剤となって、この問題が世界的に認知されたと言える。気象学者根本順吉氏は、1973年に『氷河期へ向かう地球』を書いた。しかし、彼自身が1989年には『熱くなる地球』を書かざるをえなくなった。すでに1992年以前に地球温暖化は人々の実感するところになっていたのである。

他方、こうした社会面の動きに対して、思想面はもちろんそれに先行する。一般に公害は、その影響が空間的・時間的に限定的であるという点で、地球環境問題と区別される。しかし、レイチェル・カーソンはロングアイランドでの「殺虫剤の空中散布」中止を求めながら、その思想は地球環境問題へと開かれていた。「私たちはいまや分かれ道にいる。だが(中略)二つの道どちらも正しいというわけではない。長い間旅してきた道は、見た目には楽であり、猛スピードで進むなめらかな高速道路であるが、行き着く先は破滅である。もう一つは、あまり人が通ることのない道であるが、私たちの地球を守る、最後にして唯一の機会である。」(*Silent Spring*, Rachel Carson, Penguin Books, 1991, p.240)ここでは環境問題が、人間の生き方の問題として捉えられている。カーソンは、これまで人類が歩んできた道は破滅につながるから、人類はそれとは異なる「地球を守る」道を選択すべきであることを静かに薦めている。おそらく、こうした価値観をシュレーダー=フレチェットはカーソンから引き継ぐのである。

シュレーダー=フレチェット編の名著、*Environmental Ethics* が出版されたのが1981年、その二版が1991年に出版され、そ

れを定本とした日本語訳『環境の倫理(上・下)』(京都生命倫理研究会訳、晃洋書房)が1993年に刊行された。この翻訳が日本の環境思想研究に重要なインパクトを与えたことは間違いない。そうではあるが、こうした翻訳出版への機運を盛り上げると共に、日本の環境思想研究に最も大きく寄与したのは、疑いもなく加藤尚武氏の『環境倫理学のすすめ』(丸善、1991年)であった。氏はこの著作で環境思想を仕分けし、地球環境問題を理解し解決するための「知」の基本的枠組みを構築設定した。この枠組みは「環境倫理学の三つの基本的主張」としてまとめられている。すなわち、(1)「自然の生存権の問題 人間だけでなく、生物の種、生態系、景観などにも生存の権利があるので、勝手にそれを否定してはならない。」(2)「世代間倫理の問題

現在世代は未来世代の生存可能性に対して責任がある。」(3)「地球全体主義 地球の生態系は開いた宇宙ではなくて閉じた世界である。」こうした基本的枠組み設定によって、これら三つの問題について立ち入って議論することが必要になった。また、これら三つの問題に対する立ち位置によって、環境思想家の立場が腑分けされるようになった。ただし、管見によれば、これら三つの主張が、とりわけ日本においては哲学的に深められることはなかった。地球環境問題の現実のほうがかげしさを増し、現実的対応(排出権取引の問題やリスクマネジメントなど)の仕方が優先的に議論されるようになった。

環境思想の課題はここに生じる。先の三つの主張はそれぞれが密接に絡み合い、切り離すことはできないが、以下では(2)の「世代間倫理」に着目し、環境思想の課題を考えてみたい。

加藤氏が我が国に紹介したヨナスの功績は、地球環境問題を解決するには、現代人は未来人に対して、未来人が現代人と同様の生活の質を維持できるように配慮する「責任」

があると説いたことである。彼はそのために、カント倫理学の基本概念である「完全義務」と「不完全義務」を使用した。この二つの概念はカントのみならず、ミルの倫理学も支配している近代性の倫理の基本的枠組みであるが、ヨナスの功績は、一般に「慈善」としてしか成立しない「不完全義務」を「完全義務」のように「義務化」しようと試みたところに認められる。約束が「共時的かつ相互的」であるときに、その約束の遂行は正義であり、「おこなわなければならない」完全義務である。しかし、共時性と相互性を欠いた約束は、その遂行が任意的にとどまる不完全義務である。近代性の倫理は、このような枠組みで形成されている。

英米系の環境倫理学は、シュレーダー・フレッチェットに代表されるように、この問題に小手先でしか答えることができなかった。加藤氏は京大退官時(2001年)に、一冊の翻訳を出版した。それは無名のアメリカの倫理学者、ミリヤード・シューメーカーの *Sharing Without Reckoning* (1992)、日本語版『愛と正義の構造 倫理の人間学的考察』(晃洋書房)である。この作品は加藤氏によれば、「完全義務と不完全義務に関する觀念史の試み」(同書、193頁)であるが、この翻訳を通して彼が訴えたかったのは、応用倫理学という「臨時駐車場」にひとまず陳列されている問題群を、哲学・倫理学の原理論から考察し、言わば現象と根拠とを結び付けることであった。この考察が具体的な課題として提起されると「不完全義務の完全義務化」ということになる。近代の倫理においては慈善としてしか成立しない世代間倫理を完全義務化しようとする企ては、原理から考察する存在論的問いを含まざるをえないのである。

しかしながら、こうした問いは、アメリカでも日本でもないハンス・ヨナスの故国ドイツにおいて展開されることになる。ひょっとすると、ドイツを環境先進国に押し上げたのは、環境政策の根本に存在論的問いがあったか

らではないかと考えることもある。

以上が申請時に背景として提出したものの概要である。

2. 研究の目的

これまでの環境思想の歩みを俯瞰し、その課題を明らかにするとき、上述の1.「背景」で述べたように、現代ドイツの環境哲学の水準が群を抜いている。地球環境問題が世界的に認知されるに至った現在、その問題への現実的対応だけでなく、その問題を根源から思索し、その問題解決のための「堅固な基盤構築」が必要とされている。そうした基盤構築のために格闘している現代ドイツの環境哲学、とりわけマイヤー=アービヒとルートヴィヒ・ジープの実践的自然哲学を解明する。

3. 研究の方法

地球環境問題解決へ向けて、実践哲学的に堅固な基盤を構築するために、ドイツ実践的自然哲学において独自の体系を形作っているマイヤー=アービヒとジープの実践哲学の骨格を明らかにする。

4. 研究成果

本科研は「3.11」以前に計画され、実践哲学の応用的部分の解明が中心であった。しかし、「3.11」を経験し、その方向を修正させていただいた。つまり、「3.11」後、ドイツ実践的自然哲学に基づく、より哲学的な議論が必要になり、現代の諸問題を、ヘーゲル哲学についての現代ドイツ実践哲学の解釈に基づいて原理的に考察する必要に迫られた。研究年度が一年延びたのもそのためである。その延長によって、最終年度にその成果を『ヘーゲルから考える私たちの居場所』として上梓できた。

さて、この成果物の中身は、ドイツ実践的自然哲学の泰斗ルートヴィヒ・ジープの考えに基づき、現代において大問題になっている「国家と宗教」の関係のあるべき姿を論じたものである。ヘーゲルのフランス革命解釈を出発点に、国家と宗教を相互に異質なものとして区別しながらも、なお両者は相補的關係にあるという論点を明らかにすることによって、その観点から現代批判(特にイスラム批判)の視点を得ることができた。これが第一の成果である。

次に、ヘーゲル哲学の現代的意義はどこにあるかを深く検討した。ヘーゲルの国家論は毀誉褒貶の二面性を持つが、その優れたところは「自由と平等」という二つの近代的価値の実現を目指したところにある。まず、ヘーゲル哲学の神髄はこの相対立する価値を同時にこの世に実現しようとする苦闘の中にあることを明らかにした。そしてその視点から、現代アメリカの「新自由主義」は平等をないがしろにして「自由」だけを実現しようとする、非人間的独善的思想であることを明らかにした。これが第二の成果である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

山内廣隆「イエナ ヘーゲル哲学の揺りかご」, 2013.12.20、「ヘーゲル哲学研究」, 依頼論文(査読なし), vol.19, 2013.12.20, pp99-110

山内廣隆「ヘーゲルにおける国家と宗教」, 2013.7.31、「日本カント研究」, 依頼論文(査読なし), No.14, pp23-41

山内廣隆「3.11 後を考える」, 2012.12、「政治哲学」, 査読あり, 第 11 号, pp108-124

〔学会発表〕(計 13 件)

山内廣隆、平成 25 年度夏期京都ヘーゲル読書会研究会例会、「ヘーゲルにおける国家と宗教」, 2013 年 7 月 7 日、京都教育文化センター

山内廣隆、日本ヘーゲル学会第 16 回研究大会、シンポジウム「ヘーゲル『大論理学』の意味について カントの超越論的論理学との対立から」に提題者として講演。タイトル「イエナ ヘーゲル哲学の揺りかご」, 2012 年 12 月 22 日、関東学院大学・関内メディアセンター

山内廣隆、日本カント協会第 37 回学会シンポジウム「カントと政治哲学の可能性」でシンポジストとして招待され、提題。講演タイトル「カントとヘーゲルにおける国家と宗教」, 2012 年 11 月 10 日、関西学院大学

山内廣隆、「文藝学校」第 10 回記念講演会、講演タイトル「哲学 時代を凝視する思索」, 2012 年 10 月 28 日、今井ブックセンター2F 多目的ホール(米子市)

山内廣隆、韓国プサンカトリック大学校、講演タイトル「3.11 後を考える」, 2012 年度名士招請特別講演、2012 年 10 月 8 日、プサンカトリック大学校

山内廣隆、日本都市計画学会中国四国支部 2012 年度特別講演会、講演タイト

ル「環境と哲学 環境を巡る哲学の旅」

2012 年 7 月 29 日、広島市まちづくり市民交流プラザ 6 階マルチメディアスタジオ

山内廣隆、北海道大学大学院文学研究科応用倫理教育研究センター第 7 回応用倫理研究会、講演タイトル:「応用ということ」, 2011 年 10 月 7 日

〔図書〕(計 1 件)

山内廣隆、『ヘーゲルから考える私たちの居場所』(晃洋書房) 2014.11、156 頁〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山内 廣隆 (YAMAUCHI HIROTAKA)
広島大学・大学院文学研究科・特任教授
研究者番号: 20239841

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: